

夜、一人の少女が自室で眠りについていた。

勉強机と本棚が部屋の大部分を占領し、残った空間に窮屈そうに置かれたベッドの上で、ピンク色の布団を被り、枕に頭を埋めて静かに寝息を立てている。枕元には子供のころに買ってもらってからずっと一緒にいた大きなテディベアが、少女を見守るように置かれていた。

すう、すう……規則的な寝息が、静まり返った寝室に響く。

ぴちゃり、と、そこに不快な水音が混ざった。ねばつく液体が擦れ合うような、そんな音の出所は、少女の頭の横に置いてあるテディベアだ。

ずちゅっ、じゅぶっ、ぐちゅちゅ……音は次第に大きさを増していく。小刻みにテディベアが揺れた。テディベアの中で何かが蠢いている。少女は物音に気付かず、ぐっすりと眠ったままだ。

びりびりと音をたて、テディベアの腹が裂ける。その中から、まるで腸が零れ落ちるように、ずるりと細長い触手が這いだした。紫色で、全身をべつとりと粘液に覆われた触手が、テディベアの腹から溢れだし、蛇のように這う。

粘液で布団を濡らしながら、触手はずるずると少女の身体に取り付く。柔らかな頬に粘液を擦り付け、首元からパジャマの下に入り込む。下着をつけていない小ぶりの胸の上を、べたべたに汚しながら触手は這い回った。

「んん……うう……」

流石に異変に気が付いたのか、少女が呻き声を上げ、うつすらと目を開ける。そして、自分の身体の上を這い回る触手を目にした。一瞬、何が起きたか理解できない少女。だが、次の瞬間、絹を裂くような悲鳴を上げた。

「きゃああああああああああああああああっ！」

少女が叫んだ時、既に触手は少女の全身に潜り込んでいた。首元から胸元へ、腰の隙間からズボンの中へ身を潜らせ、その素肌に粘液を塗り込んでいく。

少女は触手を振り払おうとした。だが、身体が動かない。まるで金縛りにでもあったかのように、腕も足もびくともしない。少女は身動き一つ出来ないまま、肌の上を無数の芋虫が這い回るような、鳥肌が立つほどの不快感に襲われ続けた。

「いやああああああっ！ やだあっ！ やめてえっ！ んぶっ——！」

必死に叫ぶ少女の口の中に、触手の一匹が入り込んだ。少女はわけもわからず、反射的に触手を吐き出そうともがく。だが、いくら顎に力を込めて咬みついて、触手の侵入を止められない。舌で触手を押し返そうとしても無力で、べたべたとした触手の粘液を舐めるだけに終わった。

「んぐっ、おごっ——おっ、ごほっ——」

ずるずる、ずるずる……粘液塗れの触手は何の抵抗もなく少女の喉奥へと侵入を果たし、気道を塞ぎ、胃まで入り込もうとしていた。喉を内側から撫でられる薄気味悪さ、化け物に体内へ入り込まれ、ねばねばの粘液が身体の内側に塗りたくられる恐怖、呼吸ができた

い苦しさで、少女はパニックに陥った。

「んごおっ！ おほおおっ！」

だが、少女の身体は麻痺したまま動かない。目を見開き、ピンと身体を伸ばしたまま、少女は体内を触手が蹂躪していく痛みと恐怖に耐え続けるしかなかった。

「んぎっ！ いぎいいっ！」

その時だった。下腹部から体験したこともない痛みが全身を襲った。下腹部に入り込んでいた触手が、膣と尻穴にその身を潜り込ませたのだった。硬く閉じた穴をこじ開け、粘液を潤滑剤として、触手は奥へ奥へとその身を潜り込ませ続ける。

「ひぎいっ！ んごっ、おごおおっ！」

上と下、三つの穴から身体の奥へ、どんどんと触手が入り込んでくる。ゆっくりと、だが確実に、身体の内側を穢されていく。身動き一つとれないまま、少女は腹の奥で触手が蠢く感触をはっきりと感じていた。大腸を遡り、小腸の中をぐねぐねと曲がりくねりながら、触手が入り込んでくる。膣の奥、子宮の中まで触手が入り込み、子宮の内側を触手の先端が撫でる。

「ごっ——が、かは——」

口からもずるずると触手が入り込み続ける。少女の意識が遠のいていく。視界が暗くなっていく。ずるずる、ぐちゅぐちゅ、ずちゅっ、ぐちやつ……体内から、粘液が擦れ、触手が内臓を犯していく音をはっきりと聞こえてくる。その音は脳までも犯すようだった。

少女がその小さな身体で受けるには、あまりにも恐ろしい暴力だった。痛みと恐怖、酸欠から、少女の意識が飛ぶ——その時だった。

「見つけたっ！ 今助けます！」

どこからともなく、別の少女の大声が轟く。それと同時に、暗闇に染まった寝室を眩い光が照らした。

その光の中心に、小柄な少女の姿が浮かび上がる。発育途中の肉の少ない身体、細い手足、薄い胸。その身体を覆うのは、紫と白を基調とした、アニメの魔法少女のようなひらひらとした衣服。しかし妙に露出が多く、へそ出しのミニスカートからは下に履いたスパッツが覗き見え、上は胸元しか覆っていないタンクトップに、大きなリボンが付いている。剥き出しの肩と二の腕が健康的な輝きを放ち、手袋で覆われた手の先にはカラフルな魔法のステッキを持つ。

丸い顔に、短い黒髪。童顔だが、その目には決意と戦意が込められていた。

「悪い夢魔め！ これでも喰らえ！」

少女は舌足らずな声で叫び、室内にふわりと浮いたまま、ベッドの上で這いずり回る触手に向かってステッキを振り下ろした。途端、ステッキの先端に埋め込まれた宝石が光り輝き、煌びやかな紫の閃光が放たれる。

それを受けた触手群は、光に焼かれるように霧散していく。しばらくして光が消えた時には、全ての触手は消え失せていた。

「よしっ、やっつけた！」

「よくやったわ、夢子。流石私が見込んだだけはあるわね」

夢子と呼ばれた少女の背後から、別の女が姿を現す。小柄で貧相な体形の夢子とは対照的に、大人びた肉感的な身体を持つ女性。見た目や顔からは十代後半の少女を想起させるが、その身に纏う妖艶な雰囲気と、その身体的特徴から、ただの少女ではないことは明らかだった。

レオタード状の黒い衣服がぴっちりと身体に貼り付き、豊満な胸と尻を強調している。その背からはコウモリのような翼が生え、尾てい骨からは細長く黒い尾が生え、真っ赤な長髪の奥からは二対の角が伸びている。まるで悪魔のような姿だった。

「ありがとうございます！ リリアさん！」

夢子は人懐っこそうな笑みを悪魔のような女性へと向け、ぺこりと頭を下げた。リリアと呼ばれた悪魔女は、そんな夢子の様子を微笑ましげに見つめる。

「けどまだよ。ちゃんと言われた通りに最後まで、ね」

「あ、はい！」

夢子はハッと顔を上げると、ベッドに眠る少女へと振り返った。触手が消え、地獄のような責め苦から解放された少女は、気絶しているようだ。うなされているのか、苦しげな嗚咽が時折漏れ、眉間に険しい皺が寄っている。

夢子はふわふわと宙に浮かびながら、ベッドの枕元へと身を寄せる。傍らには、内側から無惨に引き裂かれたデディベアの残骸が転がっていた。

「大丈夫、もう大丈夫ですよ。これは全部怖い夢だったんです。朝に目が覚めれば、全部忘れてますよ」

夢子は、自分よりも年上であろう少女に向かって優しく声をかける。そして、その頬に小さな手を当てた。その手がほのかに暖かな光を放つ。すると、苦痛に満ちていた少女の寝顔から、ゆっくりと陰しさが消えていった。そして、安らかな寝顔へと戻り、すうすうと寝息を立てはじめる。

「ふう、これで大丈夫でしょうか、リリアさん」

「ばっちりよ！ この世界のダメージも少ないみたいだし、しばらくすれば完全に元に戻るでしょう。さあ、今日はもう遅いし、帰りましょう」

「はい！」

リリアと夢子は笑い合うと、その姿は霧のように消えた。寝室は、まるで最初から何も起こらなかったかのように、静寂を取り戻していた。

そして、朝。

「う、うう……」

少女は重い瞼を開けた。カーテン越しに朝日が室内をほんのり明るく照らし、外からは小鳥の鳴く声が聞こえてくる。

「ひどい夢見た……ような気がする……」

少女はぼそりと呟く。内容は思い出せない。だが、何かすごく怖いものに襲われていたような、そんな気がする。凄まじくリアルな恐怖だった。死ぬかと思った……ような気がする。そして、誰かに助けられた気も。だが、詳しくは思い出せない。

「うわっ、汗びっしょり、シャワー浴びないと……」

自分が全身に玉のような汗をかいていることに気付き、少女はベッドから跳ね起きた。身体は妙に硬いが、痛むほどではない。

少女はばたばたと着替えを手に取ると、部屋の扉へ向かって歩く。

「あ、忘れてた」

と、少女はそこで踵を返し、ベッドへと戻った。そして、その枕元に置いてあった、テディベアの頭を撫でる。

「おはよう、クマ太郎！」

少女は笑顔でそう言うと、今度こそ部屋を出ていった。テディベアは、昔からずっとそうだったように、いつもと同じように、そこにあった。

同時刻。夢子は大きく口を開けて欠伸をしていた。

「ふわああ、眠い……」

「こら夢子、女の子がそんなに口を大きく開けちゃいけません。はしたない」

「はあい……」

母親の小言を受け流しながら、夢子は朝食のパンを齧る。父は既に仕事に出ていて、家にいるのは母と夢子だけだった。

「全く、お母さんに隠れて夜更かししてるんじゃないでしょうね」

「ちゃんと夜十時には寝たもん」

嘘は言っていない。夢子は確かに夜十時にベッドに入り、入眠した。だが、夢子の夜更かしは、寝る前ではなく、寝た後に行われていた。

母に隠し事をするのは少し後ろめたくあったが、本当のことを言って心配させるのも嫌だった。

「ごちそうさま！　じゃあ学校行ってくるね！」

夢子はそそくさと朝食を食べ終わると、大きな通学鞆を背負った。入学時にカタログを見ながら悩み抜いて選んだ、スマイルのような透き通った紫色の鞆だ。五年以上使い込み、いくつも傷がついてくたびれているが、それが一層愛おしい。あと一年の付き合いだというのが夢子には悲しく思えた。

「気を付けて行ってらっしゃい」

「分かってるよ！　行ってきまあす！」

夢子は見送る母に元気に手を振って、玄関から飛び出した。集合住宅の五階、上下左右にいくつも同じ部屋が並び、エレベーターを降りて外に出て見れば周囲にも同じ建物がた

くさん建っている。真っ白な外観の長方形の建物が等間隔で林立する団地は迷路のようだが、生まれた時からここに住んでいる夢子にとっては広い庭のようだった。

それぞれの建物からは夢子と同じように通学鞆を背負った生徒たちが出てきては、同じ方向に向かって歩き出し、列を作る。夢子もその列に混じり、スキップするように駆け出す。

『朝から元気ねえ、疲れてないのお？』

夢子の頭の中で、リリアの気怠げな声がした。その声は夢子にしか聞こえず、鼓膜を震わせることなく脳に直接言葉が流れ込んできている。

「だって学校楽しいんだもん」

頭の中のリリアに対して、夢子は声に出して答える。傍から見れば一人虚空に向かって話しかけているようにしか見えないが、夢子は気にしなかった。

『昨日も夢魔退治で夜遅かったし。私が夢子に頼んでおいて何なのだけれど、あんまり根を詰め過ぎないでね？ 疲れは美容の大敵よ？ お母様も心配していたし……』

「へーきへーき！ 私は元気なのを取り柄だから！」

夢子は笑いながら、青信号の横断歩道を駆け抜ける。ちゃんと手を上げるのを忘れない。通学する生徒らを見守るおばさんたちが、笑顔で夢子を見送った。

「学校も、悪者退治も、全部全力で頑張るよ！」

『そう、大丈夫なら、良いのだけれど。それじゃあ、私は寝るわ。おやすみなさい』

「おやすみ、リリア！」

そんなやり取りを交わすうちに、夢子は学校に辿り着いた。大きなコの字型の校舎、その正面に開かれた大きな正門に、色とりどりの通学鞆を背負った生徒たちが吸い込まれていく。夢子もその中に混じる。なんだか自分が自分でなくなるような、大きなものの一部になったかのようなこの感覚が、夢子は結構好きだった。

夢子は周囲の生徒たちの顔色をうかがう。その大半は元気がなさそうに沈み、俯いていた。足取りもどことなく重い。学校が嫌いなのか。いや違う。あの怪物たちのせいだ。

「私がおっと頑張らないと……」

夢子は独り言ち、小さく拳を握るのだった。

夢子がリリアと出会い、夜な夜な怪物退治を始めるようになったのは、つい一週間前のことだった。

その夜、夢子は一人、闇の中に立っていた。

「……あれ？ ここどこ？」

なぜ自分がこんなところにいるのか、わからない。どうやって来たか思い出せない。いつも通りパジャマに着替えて、ベッドに潜って、すぐに寝入ってしまったはず。だというのに、パジャマ姿のまま、知らない場所に立っている。

前後左右、どこを見渡してみても真っ暗闇。上も下も真っ黒で、自分が立っているはず

の地面さえ見えない。自分の身体だけがぼんやりと闇の中に浮かんでいて、まるで宇宙にただ一人放り出されてしまったようだった。

「お母さん？ お父さん？ いないのー？」

闇の中に向かって叫ぶが、その声はまるで闇に吸い込まれるように消えて行く。夢子は急激に孤独に襲われた。

「お母さん！？ どこ！？ どこにいるのお！？」

夢子は訳も分からず走り出す。地面を蹴っている感覚はあるが、周囲が完全な闇のため、前に進めているのかもわからない。同じ場所で足踏みをしているだけのような気もする。後ろに走っても、じぐざぐに走っても同じ。どこに行っても闇、闇、闇。誰もおらず、何もない。

「そ、そうだ、これは夢。悪い夢だ」

息を切らした夢子は、そう結論付けた。考えてみれば、眠りに落ちた後にこんなところにいるのだから、夢に決まっている。小さなころにも悪夢を見たことがあった。あれと同じだ。

「ううう、夢を覚めろおー！」

夢子は自分の左右の頬を思いきりつねった。親指と人差し指で押し潰し、引っ張り、考え付く限りの方法で痛めつける。だが、痛いだけで目が覚める気配はない。

「おかしいなあ、こうすれば目が覚めるってお母さんが言ってたのに……」

夢子は鼻をつまんでみたり、腕をつねってみたりと色々試した。だが、一向に目は覚めない。

身体のあちこちをつねる夢子。その背後の闇が蠢き、何かの姿がぼんやりと浮かび上がってくる。

「いてて……うーん、駄目かぁ……ん？」

夢子は背後の気配に気が付き、何ともなしに振り返る。そこには、灰色の木の幹のような、太い棒が二本、伸びていた。夢子はその棒の先を追い、視線を上げる。

「ひっ、ひいいいっ！」

その二本の棒は、人の脚だった。全身灰色の全裸の男が、音もなく夢子の背後に立っていたのだ。筋骨隆々で、父親よりも身長が大きい。夢子の背丈の二倍以上はある。外国人のバスケットボール選手より大きいのではないだろうか。

「あ、あの、あ、あなたは、誰、ですか……？」

夢子は恐る恐る話しかけた。本当に人だろうか。いや、もしかしたら自分が知らないだけで、全身灰色で巨体な人種もこの世の中にはいるかもしれない。見た目で人を判断するのは悪いことだと学校でも教わった。人種差別というのは良くないと。

「は、裸だと、寒くないですか？ それに、その……」

夢子は話しかけながら、視線が巨人のある一点に吸い寄せられていった。夢子の顔の丁度目の前あたりに、それはあった。全裸の巨人、その股間、そこにぶらさがった、大きな

オチンチン……のはずの物体。

遠い昔、父親と一緒に風呂に入っていたころに、見たことはある。男子と同じ教室で着替えていた頃にも、見たことはあった。だが、目の前のそれはそのどちらとも違う。

柔らかくぶらぶらと揺れていた記憶の中のそれらとは違って、目の前のモノは、固く真っ直ぐに伸び、重力に逆らって上を向いて反り立っていた。肌色でもなく、巨人の肌のような灰色でもない。スーパーで売っているお肉のような、ピンクがかった赤色。まるでソーセージのような形だが、その表面には細かな血管がグロテスクに浮き出て、びくびくと脈打っていた。

「あ、ああ……えと……」

本能的に、夢子は恐怖した。それがなんなのかはわからない。だが、なにかとても恐ろしいもののように感じ、夢子は一步後ずさる。

逃げないと、逃げないと。頭ではそう分かっている、身体が動かない。金縛りにでもあったかのようにだった。

「あ、うう……きゃあっ！」

夢子の身体が不意に宙に浮いた。気が付けば、夢子の脇の下に男の大きな掌が滑り込み、高い高いでもするかのように夢子の身体を持ち上げられていた。

地面の感覚が離れ、夢子の脚が宙でばたつく。持ち上げられ、男の顔がすぐ近くまで迫った。その顔は、まるで感情がないマネキンのような、人間という種族の仮面を被っているかのような、そんな不気味なものだった。

「いやっ、下ろしてくださいっ！ やめっ、てえっ！」

夢子は恐怖し、必死に暴れた。だが、男の掌はがっしりと夢子の胸を掴み、ビクともしない。脚を蹴り出しても男の身体に届かず、男の腕を叩いてもまるで巨木を叩いているようにビクともしない。

空中でじたばたと暴れる夢子を、男は片腕で支えながら、もう片方の腕を夢子の下半身へと伸ばす。そして、パジャマのズボンへ手をかけ、下着ごとそれをずりおろした。

「きゃあ！」

突然下腹部が丸出しになり、夢子は悲鳴を上げる。ほんのりと冷たい空気が下半身に直に触れ、全身に鳥肌が立つ。人前で局部を晒すことへの恥ずかしいという感情にはすでに芽生えており、夢子は脚を閉じてそれを隠そうとする。

男は両手で夢子の身体を支え直すと、更に高く持ち上げた。丁度夢子の股座が、男の目の前に来る。

「やだあっ、見ないでえ！」

他人に、ましてや異性に、股間を凝視されることに夢子はひどく恥辱を覚えた。それは初めての感覚だった。小さな時ならともかく、学校に通うようになってから下半身を誰かにまじまじと見られたことなんてない。

暴れる夢子の蹴りが、男の顔に当たる。だが男は全く意に介することなく、口を開いた。

その中からべっとりと濡れた真っ赤な舌が飛び出す。そして男は、夢子の股間に齧り付いた。

「きゃあああああっ！」

食べられる！ 夢子はそう思った。このままばりばりと身体を噛み砕かれ、食べられてしまうのだ。だが、そうはならなかった。男は夢子の脚の間に顔を突っ込み、下腹部を口に含むと、夢子の股間をべろべろと舐めだした。

「ひいいっ！ いやああああっ！」

何をされているのか理解できず、夢子は悲鳴をあげる。巨大なナメクジのような舌が、おしっこをしたりうんちを出したりする穴を舐めている。くすぐったさと、恥ずかしさと、嫌悪感に同時に襲われ、夢子の思考はぐちゃぐちゃになった。

舌は何度も何度もぴちゃぴちゃと音をたてて夢子の股間を舐めあげる。ぴたりと閉じたスジにそって、割れ目をこじ開けるように、何度も往復する。

「やめてえっ、ひぐっ、うっ、ううっ……」

夢子は訳も分からず涙を流し、嗚咽を漏らす。下半身から襲い来る感触に耐え、じっと堪えた。暴れても無意味だ。機嫌を損ねないよう、なるべく静かにしていよう。そうして、この男が満足するのを待とう。夢から覚めるのを待とう。夢子はそう思っていた。

ぞわぞわと悪寒の走る感覚。自分でも触れたことのない場所を、知らない男に蹂躪されているという恐怖。未知の感覚が夢子を襲い続ける。夢子は必死にそれを耐える。ぎゅっと拳を握り、歯を食いしばり、目を閉じて、耐える。

やがて、男の顔が股から離れた。唾液でぐちゃぐちゃに濡れた下腹部に空気があたり、冷やりとした。

「お、終わった、の……？」

夢子は小さく呟いた。涙でぐしゃぐしゃになった顔が、ほっと安堵に緩む。

だが、これで終わりではなかった。

「え、え？」

男は夢子の小さな身体を支えたまま、その腕を下げた。地面に下ろしてくれるのか。そんな淡い期待は、すぐに潰えた。

夢子の下腹部に、熱い何かが触れた。じんわりと温度を感じるソレは、夢子の股の割れ目に、ぴったりとあてがわれている。

「ま、まさか……」

それが男のペニスだと、夢子は察した。そしてその瞬間、脳裏に保健体育の授業で習ったことが蘇った。女子だけが集められた教室、真剣な顔つきで話をする教師。女の股に開いているのは、おしっことうんちをする穴だけじゃない。赤ちゃんが出てくる穴も開いている。その、膣という穴の中に、オチンチンを入れて、そこで「射精」をして「精液」を出すと「子宮」で「受精」して赤ちゃんが出来る……確か、そんな話。

聞いた時にはピンと来なかった。セックスという言葉の響きがどこことなく気恥ずかしく

て、こうしたことを考えるだけでも恥ずかしい気がして、自分には関係ないことだと割り切って記憶の隅に置いていた。それが今、蘇った。男の行為と繋がった。

「あ、赤ちゃん、作るの……？」

夢子はおずおずと男の顔を見上げた。そこには、能面のように無表情な顔があるだけだった。

身体の奥から、ぞわぞわと恐怖が湧き出した。

「や、やだっ！　赤ちゃん作りたくない！　セックスしたくないよお！」

夢子は赤子のように泣き出した。知らない男との子作り。性知識に疎い夢子でも、それがとてつもなくおぞましいことであることは分かった。それに、そんな大きな、夢子の腕ほどの太さもあるオチンチンが、自分の膣という穴に入るとしたら、きっと身体が引き裂かれてしまう。

怖い、怖いこわいこわいこわいこわい……夢子の頭の中はそれでいっぱいだった。

「いっ！？　痛い痛いっ！　痛いっ！」

夢子を掴む男の腕がゆっくりと下ろされ、そそり立つペニスに夢子を突き刺していく。メリメリと音をたてて、男の固いオチンチンが夢子の小さな膣に押し込まれていく。小さな穴を無理やり拡張し、肉棒が夢子の体内に喰いこんでいく。

「痛いっ！　裂けるっ、壊れちゃうっ！　やだあっ、やめてえっ！」

泣けど叫べど、男は微動だにしない。ただ淡々と、夢子の身体を引き下ろし、己のペニスにその肉を突き刺していく。穢れを知らない夢子の割れ目が無惨に開かれ、肉の槍が夢子を文字通り貫いていく。

「やだあああっ！　誰かあっ！　助けてええええええっ！」

夢子の絶叫が闇の中に消えて行く。メリメリ、メリメリ……肉が裂き、亀頭がその切っ先を狭い膣内に無理やり捻じ込まれていく。

夢子の小さな身体を、男の肉棒が貫かんとする、その時だった。

「間に合ええええええええええ！」

どこからともなく女の声がした。その瞬間、真っ暗な闇の中に一筋の光が射す。

その瞬間、夢子の身体を支える手から力が抜け、夢子は闇の中に放り出された。

「きゃああっ！」

悲鳴を上げる夢子の身体は不可視の地面に落下した。ペニスに貫かれかけた股間がじんじんと痛むだけで、落下の痛みはなかった。

「な、なに？」

夢子が顔を上げる。目の前では、巨男がよろめいていた。厚い胸板に、大きな切傷が四本走っており、その傷口から黒いドロツとした液体が垂れていた。

男と夢子の間に、一人の女性が降り立った。大きな胸と尻、女性的なそのボディラインを、ぴたりと張り付いたレオタード状の衣服が強調する。背からはコウモリの羽根、尻からは細長い尾。真っ赤な長髪。振り向いたその顔、その額からは二対の角が伸びる。

「もう大丈夫！　私が助ける！」

異形の女は夢子に笑顔向け、力強くそう言った。恐怖に支配された夢子の心が、ぱつと晴れる。暖かい言葉だった。

「こんな小さな娘を毒牙にかけようなんて、同じ夢魔として許せない！」

女は、自分よりも大きな男に対して一歩も退くことなく、啖呵を切る。いつでも獲物に跳びかかるように腰を落とすその姿は、肉食獣を思わせた。

「あああああああああつ！」

自らを鼓舞するかのように女が叫び、一気に飛び出す。そして、男の肉体に向かって両腕を振り下ろした。その瞬間、女の真っ赤な爪が鋭く伸び、男の肉体を切り裂いた。男の身体に四本の切り傷が刻まれる。

女は何度も腕を振るう。爪による斬撃が、男の巨体を切り刻んでいく。

「喰らえええっ！」

女が叫び、男の胸元に飛び込む。大きく腕を振りかぶった腕に赤い光が集まり、真っ直ぐ伸ばした指の先端から光の刃が伸びる。男の胸板を貫かんと、女は手刀を思いきり突き出した。

「あぐっ！」

悲鳴を上げたのは、女のほうだった。

どぷっ、と鈍い音と共に、女の腹に男の拳が沈み込んでいた。女の手刀は狙いが逸れ、男の肩を貫くだけに終わった。女はそのまま大きく弾き飛ばされ、ただ見ていることしかできなかった夢子のそばに転がった。

「だ、大丈夫ですか！？」

夢子は咄嗟に叫び、女に近寄る。女は腹を抑えて蹲り、苦痛に顔を歪めていた。男の方は、全身を切り刻まれていたがその傷は浅く、皮膚が裂かれるだけに終わっていた。貫かれた肩から血のような黒い粘液を溢れさせているが、致命傷には至っていない。

「くそ……やっぱ、私の力じゃ……」

女は悔しげに呟いた。男が一步一步、夢子たちに近づいてくる。その股間では、未だ怒張したままのペニスがぶらぶらと揺れ、先端から透明な液体を滴らせていた。まるで、獲物を前に涎を垂らす獣のように。

「大丈夫、安心して……私が、なんとか、するから……」

女は夢子をしっかりと見て、無理やりな笑顔を作る。そして、痛む身体を庇いながらふらふらと立ち上がる。

「お姉さん……！」

夢子は、目の前で自分を庇うように立つ女と、その奥から迫りくる男を交互に見た。

どうしよう、どうすればいい？　必死に頭を巡らせる。

男を倒さなければ。女の人を助けなければ。けど、自分に何が出来る？

こんな小さくて、弱っちい自分に、何が出来る？

何も出来ない。ただ見ていることしかできない。この悪夢を、見続けることしか。

「悪夢……？」

その時、夢子は閃いた。そうだ、悪夢だ。ここは夢の世界だ。自分が見ている夢なのだ。自分の頭の中の世界なのだ。だったら、何が起こるのかは自分次第のはず。ここでは何でも出来る。自分だって、悪者を倒せる正義のヒーローになれる。だって、ここは自分が見ている夢の世界なのだから。

「よし……やるぞお！」

夢子は自分を奮い立たせるように大きく深呼吸をし、そして、一気に駆け出した。

「えっ！？」

女が驚愕する。女の脇をすり抜けて、小柄な少女が、下半身を丸出しにしたまま、倍以上の背丈の巨男に立ち向かっていくのだ。

「待ちなさいっ！ 何してるの！」

女の静止を無視して、夢子は走る。イメージするのは、毎週日曜日に早起きして見ている魔法少女アニメ。自分と同じくらいの年頃の少女たちが、ひらひらの可愛い姿に変身し、凶悪な怪物に一步も退くことなく立ち向かい、打ち倒す姿。

ここは自分の夢の中。夢の中なら何でもできる。正義のヒーローにだって、魔法少女にだってなれる。

夢子はそう信じ、恐怖を飲み込んで目の前の怪物に挑む。

「うおおおおおおっ！ マジカルバーンチ！」

アニメキャラの必殺技名を叫びながら、夢子は拳を振り上げた。男は全く動じず、夢子を捕えようと腕を伸ばす。

夢子の拳が繰り出された、その瞬間、ドゴッ！ と凄まじい音とともに男の身体が吹っ飛んだ。

「……ええ！？」

一瞬、夢子にも何が起きたのかわからなかった。自分が拳を繰り出したその瞬間、身体の奥から力が溢れ、拳の周囲に渦を巻いた。まるでその拳が巨大化したようだった。そしてそれは、男の身体を殴打して、そのまま吹っ飛ばしたのだ。

「え？ 本当にできた！ すごいすごい！」

まさかこんなに上手くいくとは夢子自身も思っていなかった。夢子はその場でぴょんぴょんと跳びはねながら、興奮した声を上げる。

その後ろで、赤髪の女が驚愕に目を見開いて、夢子を見ていた。

「まさか、自分の夢の中とはいえ、いきなりあんな自在に力をコントロールできるなんて……あの子、すごいわ……」

そうしている間にも、吹き飛ばされた男がゆっくりと立ち上がる。表情は一切変わっていないが、どこことなく怒っているような気配が伝わってきた。男からは先ほどまでの油断は消え、腰を落とし、戦闘態勢を取っている。

「よしっ、もう一発！」

「待って！ 私が力を貸すわ！」

今にも駆け出しそうな夢子に、女が駆け寄る。

「あなたの力に、私の力を足せば、あの怪物を倒せる！ 私が弱いばかりに、こんなお願いをして申し訳ないけれど.....お願い、あいつを倒して！」

女は膝をついて視線を夢子に合わせ、正面から向き合って懇願した。夢子は一瞬面食らったが、すぐに笑顔を浮かべる。

「任せてください！ 悪い奴はこの私、魔法少女夢子がやっつけます！」

気分はすっかりアニメの主人公だった。先ほどまでの恐怖は消えていた。ここは自分が見ている夢の中。魔法少女になって悪い敵をやっつける、そういうストーリーなのだと、疑わない。

「わかったわ.....それじゃあ、強くイメージして。あなたの、戦うための姿を、強い力の象徴を、思い描いて」

夢子は言われるがまま、目を閉じて脳裏にイメージした。アニメの魔法少女が戦う姿。ひらひらの可愛い衣服。宙を自在に舞い、魔法のステッキから光の弾を出して敵を攻撃し、聖なる光で浄化する。毎週見ているその姿を、強く思い描く。

その夢子の身体の周囲に、ぼつぼつと光りが生まれていた。夢子を中心に光の粒子が円を描き、その数を次第に増やし、眩い輝きが夢子の小さな身体を包み込んでいく。

「.....え？ え、え？ なにっ、なに！？」

目を開けた夢子の視界が真っ白に染まる。そして、光が晴れた時、夢子の姿は一変していた。

「な、なにこれ！？」

夢子は自分の身体の変化に驚き、自分の身体を見回す。

パジャマは消え、見知らぬ衣服に着替えていた。白と紫を基調にした、メルヘンな服。胸元の大きなリボン、可愛らしひらひらのスカート。しかし、妙に露出が多い。上は胸元しか覆わず、肩から先は丸出し。可愛いおへそも丸見えで、スカートは極めて短く、下に履いたスパッツが覗いている。

しかし、夢子は気にしなかった。気にする以上に、自分の変身に興奮していた。

「すごいっ、すごいすごい！ 本当に変わった！」

長手袋に覆われた手や、カラフルな靴、背中の装飾まで、夢子は首をひねって自分の身体のあちこちを見ては歓喜の声を上げる。

「これであの怪物も倒せるはず！ 夢子、お願い、あいつを倒して！」

「わかりました！ 夢子、行きます！」

夢子は元氣よく叫び、飛び出す。夢子の変身にたじろいでいた大男も、すぐに体勢を立て直して迎え撃つ姿勢を取った。

夢子が、いつの間にか手の中に握られていた魔法のステッキを振り上げる。万華鏡のよ

うにきらきらと輝く杖の先端に埋め込まれた宝石が、紫色の光りを放つ。

「ヴァイオレット・フラッーーーシュ！」

アニメキャラの必殺技名を叫びながら、夢子はステッキを振り下ろす。その瞬間、眩い閃光が迸り、闇に覆われた世界を強く照らした。

「わああああああっ！」

その強さに夢子自身も驚愕し、思わず目を瞑る。光を放つ杖の反動が腕にびりびりと響き、夢子は両腕でそれを支えた。

迸る閃光は、まるで太いレーザービームのように杖から射出され、目の前に立つ男を包み込んだ。男の巨体が光に焼かれ、身体がぼろぼろに崩れていく。そして、光の奔流に押し流されるようにして、消滅した。

「ううっ……あれ、敵は？」

あまりの眩しさに目を瞑っていた夢子が正面に向き直ると、既に男の姿は跡形もなかった。夢子はなにが起きたのかすぐにわからず、きょろきょろと周囲を見渡す。

「い、一撃で……？ とんでもない才能だわ、この子……」

夢子の背後で、女が驚いたような呆れたような表情で、ぽつりと呟いた。夢子はきょろきょろと忙しく辺りを見渡し、やがて敵をやっつけたことを悟ると、女のほうを振り向いて満面の笑みを浮かべた。

「やりました！ 夢子、悪い敵をやっつけました！ やったー！」

スカートをひらひらと浮かせ、下着を丸出しにしているのも気にせず、夢子は無邪気に跳びはねる。女はその姿に、ふっと肩の力を抜いて笑った。

「ありがとう、ユメコ。おかげで助かったわ」

「いえ、最初にお姉さんが助けてくれたおかげです、ありがとうございます！」

夢子は元気よく言って頭を勢いよく下げた。ぴしっと九十度腰を曲げて綺麗なお辞儀をする夢子の姿がおかしくて、女は思わず噴き出した。

「ふふっ、楽しいわねあなた。……お願いがあるの、ユメコ。もし良ければ、だけれど……これからも、私と一緒に、悪い奴と戦ってくれないかしら」

「え？」

夢子は驚いて女の顔を見上げた。女は真剣な顔で、夢子をしっかりと見つめていた。

リリアと名乗った赤髪の女の話によれば、夢子を襲った怪物は夢魔というらしい。

夢魔は肉体を持たず、精神だけの存在で、幽霊のようにこの世界を漂っている。そして、生物に寄生し、その生命力を吸い取って生きている。その方法とは、肉体と精神が無防備な状態となっている就寝時の夢の中に現れ、悪夢を見せること。精神を弱らせて防御力を下げること、対象から生命力を吸収できるようになる。

「実は私も夢魔なの。ほら、角とか羽根とか尻尾とかついてるでしょ？」

「え？ じゃあ悪い人なんですか？」

「いいえ、私は.....というかほとんどの夢魔は、人間を弱らせる程の悪夢なんて見せないわ。悪夢じゃなくて、淫夢.....つまり、エッチな夢を見せて、心に隙が出来たところを、ちょっとだけ、その人が弱ってしまわない程度に生命力を頂くの。エッチの後ってとっても無防備になるのよ？　あなたくらいの年だと流石に経験はないでしょうけど」

「え、エッチな夢.....？」

夢子はなんだか顔が熱くなった。エッチな夢とはどんな夢だろう。リリアのぴっちりしたレオタードを押し上げる豊満な胸と尻から、夢子はつい視線を反らした。

「私たち夢魔は.....サキュバスとかインキュバスとかも言われてるけど、とにかくそうやって、人と共生してきた。けど最近、夢魔の中でも過激派.....つまり悪い奴らが出てきたの。奴らは強い力を得るために、人間に悪夢を見せて痛めつけて、生命力を根こそぎ奪い、その人を弱らせてしまうの」

「それがさっきの大きな男の人ですか？」

「そうよ、アイツみたいなのがまだたくさんいる。私はアイツらが許せなくて戦い始めたんだけど.....」

「なるほど.....とにかく、リリアさんは良い人で、悪い人たちをやっつけようとしているんですね？」

「そんな感じよ。けど、アイツらは人間から生命力を吸い取りまくって力を増している。普通の力しか持たない私じゃ、倒すことは難しくて.....そこで、夢子に力を貸してほしいのよ」

「え？　私ですか？」

「そうよ。夢子の持つ生命力はとても大きい。それに、夢の中ではしっかりと意識を保てる精神力。自分を信じる心の強さ。素晴らしいわ。夢の中での行動を私がサポートすれば、夢子は自由に夢の中を飛び回り、夢魔を倒すことが出来るようになるの。お願い、力を貸して。私は人間を守りたいの」

リリアは、自分よりも一回りも二回りも小さな夢子に対して、深々と頭を下げる。夢子は少し戸惑ったが、それでも、答えは決まっていた。

「はい！　分かりました！　私、戦います！」

そうして、夢子はリリアと組み、夢魔の力を得て、夜な夜な人を襲う悪い夢魔を退治して回っていた。

アニメのヒロインのようなひらひらの衣装を着て、夢の中をふわふわと飛び回るのとはとても楽しかった。ちなみに露出が多いのは、サキュバスであるリリアの影響らしいのだが、夢子に難しいことはよくわからなかった。細かいことを考えるより、魔法少女に変身できる興奮のほうが勝った。

悪い夢魔は怖いこともあったが、襲われている人を助けるためなら勇気が湧いてきた。そうして一週間、夢魔と戦い続けてきた。人のために働くのはやりがいはあったが、いか

んせん、しっかりと睡眠がとれないため寝不足気味なのが玉に瑕だ。

「ふわあ……おはよお……」

大きな欠伸を噛み殺しながら、夢子は教室の引き戸を開け、自分の教室へと足を踏み入れた。六年一組。それが夢子がこの春から通っている教室だ。夢子に向かって、一人の少女が手を振った。

「おはよう夢子、眠そうだね」

「おはよう明里ちゃん！ 私は元気だよ。元気だけが取り柄ってママに言われたもん」

「それって褒められてるの？」

「え？ 違うの？」

「いや……どうだろう」

明里は曖昧な笑みを浮かべた。明里の頭の上で二つ結びにした短い髪が、触角のようにびよこびよこと揺れる。

「夢子もだけど、最近みんな元気ないよね、なんか暗い感じ」

「そう、だよな……」

夢子は明里の後ろの席に座りながら、周囲を見渡した。明里の言う通り、教室にいる生徒たちの半数近くは表情もなく机を睨み付けているか、虚空を見上げていた。この年頃の少年少女たちとしてはあり得ないほど、暗く沈んだ空気が漂っている。

それは夢魔のせいだと、夢子は知っている。この地域一帯に出現した夢魔が、若く新鮮な生命力を求めて生徒たちを襲い、夜な夜な生命力を食い荒らしているせいだ。

早く何とかしてあげなくちゃ、と夢子は決意を新たにす。

「ねえ、知ってる？ なんでみんな元気がないか」

「……うえ？」

物思いに耽っているところにいきなり尋ねられ、夢子は素っ頓狂な声を上げる。明里は、夢子のそんな反応にけらけらと笑いながら、声を潜めて続けた。

「何か変な夢を見るらしいよ。みっちゃんもけいちゃんも見たって言ってた」

「ゆ、夢？ ど、どんな……？」

いきなり核心に触れられ、夢子はしどろもどろになって聞き返す。明里は気にせず、夢子に耳を寄せて悪戯っぽく囁いた。

「なんでも、無理やりエッチなことをされる夢なんだって……起きた時には内容は覚えてないけど、それだけは覚えてるんだって」

夢魔のことだ。もう学校の噂になっているのか。夢子はごくりと唾を飲む。

「毎晩毎晩悪夢に魘されるから、寝るのが嫌になって、夜更かしするから疲れちゃうんだって。寝ても悪夢を見るから全然休まらないんだって。怖いよねえ」

明里は夢子を怖がらせるように、おどろおどろしく耳元で語った。夢子としては既知の事実だったが、それを悟られるのも良くないと思い、大げさに驚いてみせた。

「ええ？ 本当？ 怖いねえ」

わざとらしい態度に、明里は真顔になり、ずっと顔を引く。

「夢子、信じてないでしょ」

「そ、そんなこと、ないよお」

「ふーん。てか夢子ってエッチの知識あるの？」

「あ、あるよお、もちろん」

「本当？　じゃあ.....オナニーもしてる？」

最後の言葉は周りに聞こえないように、明里は静かに呟くように言った。

「おなにーってなに？」

「馬鹿、声が大きいって。ま、所詮お子ちゃまな夢子じゃそんなもんよねえ。夢子なら悪夢を見ても平気そうだわ」

「ちょっと、なにそれえ」

明里は得意気に薄い胸を反らして鼻を鳴らしている。夢子には言葉の意味はよくわからなかったが、小馬鹿にされていることだけは分かった。明里は昔から色んな知識を仕入れては大人ぶることがある。今回もそれだろう。夢子は少しむっとしたが、夢子の知らないことを知っている明里に惹かれていることも確かだ。

「実はさ、私も最近見るんだよね、エッチな夢」

「え！？」

唐突にそう告げられ、夢子は教室中に響くような大声を出してしまう。周囲の胡乱な瞳が、一斉に夢子たちに向けられた。

「だから声が大きいって！　.....あんまり覚えてないけど、なんか朝起きた時に身体がムズムズするんだよね.....私も元気なくなっちゃうのかなあ。やだなあ。エッチなのはまあ、別にいいんだけどさ」

ぼそぼそと独り言を呟く明里の言葉を、夢子は聞き流した。それどころではない。明里もまた夢魔に襲われ、生命力を奪われようとしている。早く助けてあげないと。そう思い、夢子は明里の手を取った。

「な、なに、どうしたのいきなり？」

「明里ちゃん、大丈夫。明里ちゃんの元気は私が守るよ！」

夢子はにっこりと満面の笑みを明里に向け、明里の暖かい手をぎゅっと握った。明里は何が何だかわからず、きょとんとした困惑顔を浮かべていた。

『で、今日は明里ちゃんって子を助けに行くのね？　家は知ってるの？』

「うん、このマンションの三つ隣。何度も遊びに行ったことあるから、迷わないよ」

『そう、それは良かったわ』

夜になり、食事とお風呂を終えてパジャマ姿で自室に戻った夢子は、自分の頭の中に同居している夢魔リリアと言葉を交わす。後はベッドに入るだけだ。

「夢魔のことが学校で噂になってたよ。速くみんなを助けてあげないと」

『そう……まだ結構な数の夢魔がうろついてるみたいだから、しょうがないわね。けど、焦りは禁物よ。夢子が先に倒れちゃったら意味ないんだから』

「分かってるって、大丈夫だよ。じゃあ、行くよ」

夢子はすりとベッドに身を滑り込ませ、枕元のリモコンで電灯を切る。さて目を閉じようとしたところで、ふと思い出したように、リリアに聞いた。

「そういえば、明里ちゃんが言ってたんだけど、オナニーって何？」

『……最近の子は進んでるわねえ』

「エッチなこと？」

『また今度教えてあげるわ。とりあえず、早く行きましょう』

リリアに急かされ、仕方なしに夢子は目を閉じる。夢子の視界が暗闇に閉ざされ、意識が後ろに引っ張られ、ベッドを突き抜けて落ちていくような感覚に襲われる。だが、途中でその流れが反転する。夢子の身体が、まるで風船のようにふわりと浮かび、上昇する感覚。ふわり、ふわりと浮き上がり、自分という存在が身体から抜け出ていく。夢子はゆっくりと目を開ける。

目の前には、自分の寝顔があった。夢子の意識は肉体から抜け出て宙に浮き、ベッドの上の自分と向かい合っている。

「こんばんは、夢子」

声のほうへと振り向けば、そこにはリリアの姿があった。夢子の自室の中でふわりと浮きながら、夢子に向かってウインクを飛ばしている。

「こんばんは、リリア」

「よし、じゃあ行きましょう。道案内よろしくね」

「うん、行こう！」

二人はそう言って、ベッドの脇の窓へ向かった。カーテンの閉じたその窓を、二人の身体がすりとすり抜ける。そして、二人は夜の空に飛び出していく。

夢子の意識は肉体から抜け出て精神だけの存在となったことで、同じく肉体を持たないリリアを視認することもできるようになり、さらに物理的な制約に囚われることがなくなった。夢子は自身のイメージする自分の姿である魔法少女姿となり、リリアと共にマンションの間を縫って飛ぶ。真下の道路では僅かに人々が行きかっていたが、精神だけの夢子たちを視認することはできない。

「あそこ、あの窓の向こうが明里ちゃんの部屋だよ」

似たような建物が並び、規則的に窓が並んでいる中から、夢子が一つの窓を指し示した。緑色のカーテンが引かれ中をうかがい知ることは出来ないが、壁をすり抜けられる夢子たちには関係のないことだ。

「まだ部屋の中が明るいわね、起きてるのかしら」

「明里ちゃんって夜更かしなんだあ。速く寝ないと駄目なのに」

「夢子も夜更かししてるじゃない」

「いつもはちゃんと寝てるもん。最近は夢魔退治で忙しいだけ。それに、身体のほうは寝てるんだから良いでしょ？」

「精神が起きてると疲れは取れないのよ。はあ、やっぱり休みの日を作るべきね」

「そんなことしてたら被害が広まっちゃうよ」

「一日くらい休んでもばちは当たらないわよ」

そんなやり取りを交わしながら、二人は窓に近づいていく。そして、頭から窓に突っ込み、部屋の中へと入り込んだ。

「うわあっ！」

「あらら……」

二人は同時に声を上げた。夢子は驚愕で、リリアは呆れの混じった声で。

窓の下、ベッドの上で、パジャマ姿の明里が横になっていた。だが、眠ってはいなかった。明里はズボンと下着を膝下までずり下ろし、剥き出しになった陰部を指で弄っていた。

「んっ、くっ、ふうう、んんっ……」

悩ましげな明里の嬌声が、静かに室内に響く。部屋の外にいるであろう親には聞こえていないだろうが、同じ部屋の中にいる夢子たちにはハッキリとその声が聞こえていた。

「な、何？ リリアさん、もうエッチな夢の中に入っちゃった？」

明里が何をしているのかわからず、あたふたと空中で身をもつれさせる夢子。リリアはばつの悪そうな顔を浮かべ、呟く。

「まだ現実よ。夢子。えーと、これが、オナニーよ」

「え？ これが？」

言われて夢子は、部屋に浮かんだ状態で真下にいる明里を見下ろした。明里は苦しげな、けれどどこか切なげな表情を浮かべたまま、執拗に自分の股間を弄っている。くちゅくちゅと淫靡な水音が、明里の嬌声に混じって聞こえてくる。

「んんっ、ふうっ、んあっ、はあっ……」

その声は夢子が聞いたこともないものだった。いつも元気で、明るく、周囲を小馬鹿にするような、ませたところのある明里が、おしとやかな女の子のような、か細く弱々しい声で鳴いていた。快活に揺れる触角のようなツインテールも今は解かれ、長い髪が明里の額に汗でひつつき、煽情的に乱れている。

「あっ、あふうっ、んっ、くうっ——」

指の動きは激しさを増し、それに合わせて明里の声も大きくなる。片手で股を弄りながら、もう片方の手で未発達のを胸を弄る。激しく身悶え、着ているパジャマは乱れに乱れ、全身には玉のような汗をびっしょりと浮かべている。ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ……自らの秘所を指で激しく掻き回し、明里は枕に頭を押し付けて声を抑えた。

「ふぐうっ、うっ、んっ！ んんんっ……ふうっ！ んあっ！」

明里はうつ伏せになり、尻を浮かせる。痙攣するように尻がかくかくと震え、それでも股を弄る指の動きは収まらない。

「う、うわあ……」

夢子はそんな明里の姿になぜか心を奪われ、次第に距離を近づけていた。明里の指がどうなっているのか気になって、お尻のほうからその痴態を凝視する。

股にある割れ目を、明里の指が激しくなぞる。二本の指で、割れ目の頭にあるぼつちりとした豆のような部位を挟み、擦り、押し潰し……その度に明里の身体が震え、割れ目がひくひくと蠢く。指の動きに合わせて割れ目がぐにぐにと動き、割れ目の奥に空いた穴……赤ちゃんを産むための穴からは、おしっことは違う液体がとろとろと溢れてきて、腿を伝ってベッドに滴る。

夢子にとって、まじまじと女性器を眺めることは初めてだった。自分のものもちゃんと見たことがない。そもそも普通にしていれば見えるものではないのだが……とにかく、生で見る女性器は、どこことなく艶めかしく、いやらしい。

「んくっ！ んっ……んんんんんっ！」

枕に埋めた顔から、くぐもった嬌声が聞こえた。明里の全身がぷるぷると震え、ぴんつと指の先まで力が籠る。と思えば、全身から力が抜け、持ち上げていたお尻がベッドに落ちる。

「ふーーーー、ふーーーー、ふう、ふっ……ふああ……」

明里の荒い呼吸が枕に吸い込まれていく。その指は未だに名残惜しむように股を弄り、溢れた蜜をくちゅくちゅと弄んでいた。

「す、すごい……」

夢子はそれをすぐ近くで、穴が開くほど凝視していた。自分で自分の股間を弄って、苦しそうだったけど、どこか気持ちよさそうで、あんな声を上げて……なぜか心臓がドキドキと高鳴っていた。今の姿は精神だけだが、肉体の感覚はそのままある。身体中が熱くなり、なんだか恥ずかしくて顔から火が出そうだった。

「り、リリアさん、これがオナニーですか？」

「ええ、まあ……これがオナニーよ」

興奮冷めやらぬといった様子の夢子と対照的に、リリアはどこか居心地が悪そうに頬を掻いていた。

「夢子、あのね、人のオナニーをそんなにまじまじと見てはいけません。自分が見られたら嫌でしょ？」

「……そうだね」

「でしょ？ だから今日見たことは忘れなさい。絶対に明里ちゃんにバレないように気をつけてね」

「……はい」

夢子は素直に頷いた。確かに、友人の見てはいけない姿を見てしまったような気がしていた。なんだかとても悪いことをしてしまった。明日会った時に謝ろう。いや、内緒にしなければいけないのだから、謝っちゃダメか。

そんなことをつらつらと考えているうちに、行為を終えた明里は乱れた衣服を整えていた。びっしょりと汗に濡れた身体を拭くこともせず、パジャマが濡れることも気にならない様子だ。

「はあ、はあ……またしちゃった……」

息を整えながら、明里が独り言ちる。

「どうしてこんなにムラムラするんだろう……おかしくなっちゃたのかなあ、それともこれが普通なのかなあ」

明里は誰にでもなく呟く。独り言ではあったが、知らず知らずのうちに同じ部屋にいた夢子たちにはハッキリと聞こえてしまっていた。

「ねえリア、これってやっぱり？」

「多分夢魔の影響ね。寄生した相手の性的欲求を増幅させてるわ。ここまで現実への影響が大きいなんて、きっと強い夢魔よ」

「なら早くやっつけないと！ 明里ちゃんが危ない！」

「そうね、早く解放してあげましょう。さあ、明里ちゃんが寝るわよ」

二人が見守る中で、明里は呼吸を整えると、枕元にあったリモコンを捜査して部屋の電気を消した。そして、布団を頭まで被ると、自慰の疲労感もあってか、すぐにすやすやと寝息を立てはじめた。盛り上がった布団が、呼吸に合わせて一定のリズムで上下する。

「寝たわね。よし、いくわよ夢子」

「うん、明里ちゃん、今助けるよ！」

二人はそう言うと、その身を布団に近づけた。精神だけの存在の二人の身体は布団をすり抜け、その中で眠る明里の身体へと吸い込まれるようにして消えて行く。こうして、二人は明里の見る夢の中へと入り込んだ。

——— 体験版はここまでとなります ———